闇に咲く花

―愛敬稲荷神社物語―

井上ひさし

闇に咲く花

―愛敬稲荷神社物語―

井上ひさし

講談社

闇に咲く花 ―愛敬稲荷神社物語―　定価 七六〇円

第1刷発行　昭和62年12月5日

著　者　井上ひさし

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社　講談社

〒112　東京都文京区音羽2―12―21

電話　東京(03)945―1111(大代表)

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

©HISASHI INOUE 1987 Printed in Japan

ISBN4-06-203750-5 (0) (文2)

目次

第一幕

第一場　御賽銭箱（おさいせんばこ）　7

第二場　御神籤（おみくじ）　37

第三場　神鈴（すず）　75

第二幕

第四場　種銭（たねせん）　111

第五場　御守（おまもり）　147

第六場　太鼓（たいこ）　183

装幀　小林久太郎
カバー絵　ペーター佐藤
口絵写真　谷古宇正彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

闇に咲く花

——愛敬稲荷神社物語——

登場人物

牛木公麿（52）
その一人息子・健太郎（27）

稲垣善治（27）

遠藤繁子（35）
田中藤子（33）
中村勢子（29）
久松加代（25）
小山民子（21）
子守りの少女

神田警察署猿楽町交番・鈴木巡査
吉田巡査

GHQ法務局主任雇員・諏訪三郎

ギター弾きの加藤さん

場所

千代田区神田猿楽町愛敬稲荷神社

時

昭和二十二年（一九四七）夏

第一幕
第一場　御賽銭箱（おさいせんばこ）

ギター奏者（加藤さん）による序曲。

序曲の終りどろ、おかめ、ひょっとこ、天狗に般若（はんにゃ）、それから野球選手の顔などが、闇の中に浮び上ってくる。いずれも玩具のお面である。

序曲の終るのと同時にすっかり明るくなると、そこは神田駿河台を西へくだる途中にある愛敬稲荷神社（あいきょういなり）の境内（けいだい）。境内は通りから石段を七、八段登った高さにある。

境内には神楽堂（かぐら）と（支度ノ間へ通じる）渡り廊下しか残っていない。その渡り廊下も半分

で焼け落ちてしまっている。二年以上も前の空襲でこの神社は数発の焼夷弾の直撃を浴び、ほとんど壊滅してしまったのである。

神楽堂は少し手が加えられて住居とも、本殿とも拝殿ともつかぬ奇妙なたたずまいを見せている。上手側下手側には障子が入り、そこここにボロボロの衣類がぶらさがり、隅に煎餅布団が畳んで置いてあるところは人間の住居にちがいないが、正面奥の板壁には壁代が下り、その上に鏡が架けられ、辛櫃などが安置されているところは、どう見ても本殿か拝殿である。それになにより神鈴もあれば、賽銭箱もある。

下手にバラックが半分見えているが、これは玩具のお面工場。あちこちに紐が張りめぐらされ、お面が干してある。序曲の終りに見えていたのはこのお面である。ギター奏者の加藤さんはこのお面工場の板壁の前に坐ってギターを弾いている。

なお、上手は被弾以前、本殿や拝殿、社務所や手水舎があった本来の境内に通じ、下手は裏の石段に通じている。ちなみにこの神社は、稲荷の神木である杉の木立（十数本）にゆるやかにかこまれている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第一場　御賽銭箱

初夏（五月十九日月曜日）の午後おそく。西（下手）からの陽光が舞台を明るく照らし出している。

——と、神楽堂で昼寝をしていた男が、むっくと上半身を起して下手の石段へ聞き耳を立てる。ギターの音が低くなる。男は神主の牛木公麿。膝の抜けたズボンに着古した開襟シャツ、そして毛糸の腹巻。神楽堂から飛び降りた公麿は石段際に立って、ふうふう云いながら登ってくる五人の女を迎える。まず最初が遠藤繁子。臨月のおなか。

公麿　お疲れさん。

繁子　ただいま、神主さん。

田中藤子。もっと大きなおなか。

公麿　ご苦労さん。

藤子　からだがバラバラになりそうだ。

中村勢子。さらに大きなおなか。

公麿　りっぱなおなかだ。

勢子　目が霞(かす)む。

久松加代。いっそう大きなおなか。

公麿　みごとなおなかだ。

加代　はやく楽になりたい。

小山民子。一等大きなおなか。

公麿　おなかの中のおなかだ。

民子　お水。

五人はそのへんにへたり込む。公麿は土瓶の水を飲ませてやりながら、

公麿　成田からよく頑張ったねえ。経済警察の検問は？

繁子　ありましたよ。

公麿　どこで？

藤子　小岩駅。

公麿　わたしの授けた作戦が少しは役に立ったようだね。

勢子　（頷いて）成田のお不動さまへみんなで安産祈願に参っての帰りです、そう云って押し通しましたよ。

加代　でも、小岩駅ではお藤さんの芝居が効いたのよね。

民子　経済警察官の顔色がさっと変って、「こいつ等、どうも怪しいぞ」というような目つきをしたの。その途端、お藤さんがべたっとプラットホームに坐り込んじゃった。

加代　目を剝いて震えながら、「生れそう、生れそう。安産祈願が効きすぎて、こんなに早く産気づいちゃった」。

勢子　そしたら経済警察官が、「駅の構内での出産は望ましくない。さ、通れ、通れ」だって。

藤子　お繁さんにお礼をいいなさいよ。智恵をつけてくれたのはお繁さんなんだから。

公麿　いずれにもせよ天晴れな大戦果だ。それで？

繁子　（おなかを抑えて）五升。

藤子　六升。

勢子　七升。

加代　一斗。

民子　一斗二升。

繁子　しめて四斗、一俵ですね。

公麿　（感動）これまでの最高記録だ。

繁子　（正面の壁代を指し）あれと同じ白絹の壁代を六枚も持って行ったんですよ。それはもう上等の絹地。ブラウス、ワイシャツ、なんにでもなります。お百姓さんたち、二つ返事でお米との交換に応じてくれました。

公麿　この次は祭の幔幕にするか。

藤子　あれは丈夫この上なし。上着にしたら十年は保つわよ。

繁子　二俵や三俵にはなるわね。でもね、神主さん、そのうちにこの愛敬稲荷神社、丸裸になって、神社じゃなくなってしまいますよ。

公麿　そのときはまたそのときの話さ。なにはともあれ喰うことの方が先決です。

勢子　神事のお道具を片ッ端からお米に化けさせたりして、罰が当らないかしら。

加代　（点頭して）ときどき神主さんの片棒かついでいるのがこわくなる。

公麿　神様は、ずいぶん前からお留守のようだね。

民子　お留守？　どうしてそんなことがわかるの。

公麿　戦争中、神風がそよとでも吹きましたか。日本中の神主たちが毎朝、水垢離をとって、「神風を吹かしめたまえ」と祈念した。ところがお留守だからその願いが届かなかった。しかもなお、依然としてお留守のようだから罰をおくだしになることはおできにならない。

藤子　専門家がああおっしゃっているんだから、びくびくすることはないのよ。

勢子　わかった。

加代　よかった。

民子　ほっとした。

公麿、賽銭箱の前に立って、

公麿　それじゃおなかを空にしてもらおうか。五升はわたしがたべる。二斗を闇で流す。残りの一斗五升はみなさんのおなかの借り賃だ。お繁さん、それでいいかね。

繁子　大助かりです。

公麿　（ギターの加藤さんに気付いて）あんたにも五合ばかり進呈しようか。口止め料だよ。

加藤さんは無表情。

早くも繁子が上着の下から袋の口を出して、おなかのお米を賽銭箱に空けはじめる。次は勢子。公麿は介添え。――と、赤ン坊を背負った少女が裏の石段をあがってくる。一同、ギョッとしてお面つくりの作業中を装おうとする。しかし、相手が少女と知ってホッとなる。少女は賽銭箱に気づいてポケットを探る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong